

# 「確かな日常で、心豊かな生徒の育成」

副題

～ICT機器の活用による、追究する力・関わり合う力・表現する力の育成～

キーワード

タブレットPC、協働学習

学校名

岡崎市立額田中学校

所在地

〒444-3622  
愛知県岡崎市榑山町原新田88番地

ホームページ  
アドレス

<http://www.oklab.ed.jp/nukata/>

## 1. 研究の背景

本校では、校風として確かな日常を大切に、基本的な生活習慣を身に付け、当たり前が当たり前でできる生徒の育成、一人一人が存在感や充実感をもてる学校生活の創造をめざしてきた。とりわけ、寮を併設し、遠方の小規模校出身の生徒を受け入れながら、自治的な活動を推進し、独自の活動や文化を培ってきた。

しかしながら、近年は生徒指導困難校となり、学校の荒れに職員が奔走した。乱れた寮や学校生活の立て直しが急務となり、本年度、ようやく回復の兆しが見られ、生徒も落ち着いた生活を送れるようになった。その間、授業の質の向上やわかる学習の展開など、本来傾注すべき部分に十分な取組ができなかった点は否めない。「学校の荒れ」がおさまりつつある現在、喫緊の課題は生徒の学力向上である。

こうした中、平成 26 年度から校内で「学力向上戦略会議」を設置し、基礎学力の定着と自主的に学ぶ学習方法を身に付ける授業の在り方について議論が交わされた。「活力ある授業とは」「学力向上を目指した学習規律の確立」「学習活動の工夫」等について、全体会、教科部会で話し合いがもたれた。平成 26 年の段階ではその方向性と基礎学力定着の手だて、検証が中心であり、本年度から授業改善を軸とした実践に向かうことが確認された。

本校の生徒の学力は極端に低い。まずはこの現状を、目をそらさずに、真正面から向き合いたい。額田中学校の子供たちの学力を向上させたい。その熱い気持ちをもつこと。そして、「そのためには、どうすればいいのか。」を真摯に考え、実践することが急務である。

「学力」にはさまざまな意味での「学力」がある。本校の生徒の「学力」はそのいずれもが低い。本校では、その「学力」に注目し、授業改善することを提案した。

(「H26研究のまとめ」より)

## 2. 研究の目的

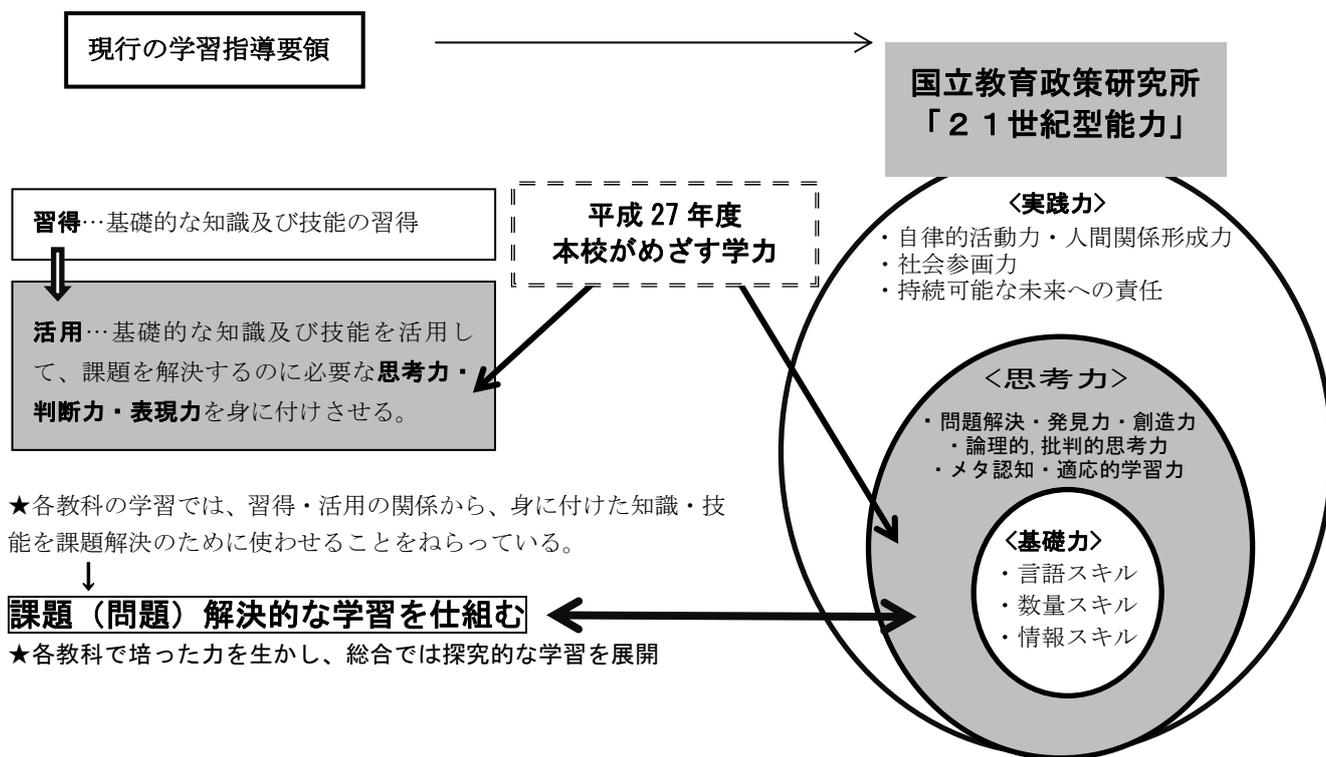
昨年度9月に、市の予算で各中学校にタブレットPCが配備され、本校にも20台のタブレットPCが配備された。さっそくタブレットPCを活用した授業に取り組んだところ、生徒たちの学習に対する意欲が喚起され、授業への参加度がより一層高まった。タブレットPCの活用は、生徒の意欲を高め、学習効果を上げるためにとても有効な手立てであるのではないかと感じている。しかし、ICT環境として、アクセスポイントが1つしかなく、使用するたびに機材を移動させ教室内に設置している状況であり、大変使い勝手が悪く、タブレットPCの活用が思うように進んでいない。そこで、校内に無線LAN環境を整備し、いつでもタブレットPCが使える環境を作りたい。そして、タブレットPCを活用した授業実

践を通して、生徒たちの追究する力・関わりあう力・表現する力を育成し、確かな学力をつけ、心豊かな生徒を育成していきたいと考えている。

### 3. 研究の方法

今年度の研究では、より具体的に「どう子供の学力を伸ばすか」にスポットを当てる。今年度の研究の重点は、いわゆる「見えにくい学力」の部分を中心に、授業改善を柱とした取組を行う。いわゆる「見えにくい学力」を高めるためには、学ぶことへの意欲や学ぶ楽しさを実感させることなどが必要である。学ぶ意欲や学ぶ楽しさは、子供が主体的に学習に取り組めてこそ味わえるものであり、そのために教師は授業を行う上で、課題(問題)解決的な学習に配慮する必要がある。学習指導要領が求める「生きる力」とは、子供の将来を取り巻く様々な問題に主体的に関わり、解決に向けて主体的に取り組む力を育てることに他ならない。そのために、ただ結果として表れる学力のみを目指すのではなく、根底にある学ぶ力の育成が、真の学力向上につながると考える。本校では、学力の向上に必要な要素として生徒自ら課題を見つけ、それを解決・達成する過程で学ぶ楽しさを味わうことが重要と考える。下の図は現在の学習指導要領と、国立教育政策研究所が示した「21世紀型能力」の図式である。本校でめざす学力は、下の図に矢印で示した思考力・判断力・表現力の育成の部分と合致する。

#### 21世紀を生きる力の考え方の変遷



思考力は、主として目の前の課題(問題)を解決する際に働く力である。目の前の課題に対して自分の考えをもち、解決への道筋や必要な情報を集め、思考・判断し表現する営みは、本校が目指す「見えにくい学力」の育成と合致する。よって本校では、「21世紀をたくましく生き抜く資質」を、「主体的に自らの考えを他者と学び合いながら深め、よりよい考えや新たな課題を生み出す力」とし、授業レベルでどう身に付けていくかを研究の核とし、授業改善を進める。

よって、めざす生徒の姿を以下のように設定した。

### めざす生徒像

「主体的に他者と関わりながら考えを深め、新たな課題を見出して学び続ける生徒」

## 4. 研究の内容・経過

### 仮説1<学ぶための力>

子供の主体性を育む教育活動を日常に位置付け、他と関わって生活したり、自治的に自ら考え、行動したりする活動を推進すれば、言動に積極性が生まれ、進んで活動できるようになり、学習への活力が高まるであろう。

#### 仮説1に対する手だて

- (1) 他と関わりながら自分の考えを自分の言葉で伝える力を身に付けさせるために、テーマを基に少人数で意見を述べ合う「額中タイム」を定期的実施し、会話や話し合いのスキルを高める。
- (2) 授業への心構えや取組をより高めるために、生徒が自ら考えて方策を練るように仕向け、決定した「額中生5つの約束」を徹底し、規律と意欲に満ちた授業の基盤をつくる。
- (3) 相手の立場を尊重してよりよい意見を述べる力、集団で折り合いをつけ、意思決定する力を育むために、行事や日常の生活で縦割り活動を取り入れる。

- ① 授業準備をして、一分前までに着席する
- ② 正しい姿勢で授業を受ける
- ③ 指名されたらはっきり返事をする
- ④ 自分の考えを積極的に大きな声で発言する
- ⑤ 顔を上げ、話す人を見て聞く

「額中生 五つの約束」



教室に掲示された  
「額中生五つの約束」

### 仮説2<学ぶ力>

生徒自ら課題を見つけて追究する場や、見つけた課題の解決に向けて自分の考えをはっきりさせる場、集団で練り合う場、高め合う場を設定し、主体的な追究へと誘う教師支援をすれば、思考力・判断力・表現力が高まり、学ぶ楽しさが実感できるであろう。

#### 仮説2に対する手だて

- (1) 学習への目的意識をもたせ、主体的な学びへと誘うために、生徒の思考の流れを軸にした単元構想を練り、単元や授業の導入で生徒の問題意識を生み出す工夫をする。
- (2) 課題に対してより確かな根拠をもった学びを構築させるために、「マイタイム」を単元計画に位置付け、追究過程の生徒の考えを揺さぶったり、曖昧な考えを自覚させたりして、生徒の考えをはっきりさせる教師支援を行う。
- (3) 個の学びをさらに深めるために、「マイタイム」で得られた個の考えを全体の出し合い、関わり合う場を設定し、座席表の活用、板書や意図指名の工夫など、関わり合わせるための教師支援を行う。
- (4) 個の学びをさらに深めるために、ペアやグループでタブレット PC を活用して自分の考えを述べさせたり他者と自分の考えを比較させたりして、関わり合う場を設定し、意見交流を促すための教師支援を行う。

### 仮説3<学びを生かす力>

学力がどれだけ定着したかを分析して対策を講じたり、学力を定着させる指導の工夫を取り入れたらすれば、いわゆる「見える学力」も高まり、生徒の自信や意欲につながるであろう。

#### 仮説3に対する手だて

- (1) 基礎的な学力の定着を図るために、各教科で基礎基本となる事項や身に付けさせたい内容を具体的にし、指導を工夫する。
- (2) 学力の実態を把握するために、学力検査や定期テスト等の分析を密に行い、身に付いたことと足りないことを明らかにして、対応を協議する。

### 5. 研究の成果

#### <成果>

##### 仮説1の手だて

- ・毎回テーマを変えて実施した「額中タイム」によって、相手を意識して話す、考えを整理して話す等の話し合いのスキルが高まった。
- ・「額中生五つの約束」の取組では、①1分前着席②正しい姿勢で授業を受ける③指名されたらはっきり返事をする④自分の考えを積極的に大きな声で発言する⑤顔を上げ、話す人の方を向いて聞く、の各項目の教師による評価が、平均 3.5(5段階による評価)となり、初回と比べて 1.0 以上の向上が見られた。
- ・行事での縦割り活動の推進により、話し合い、練り上げる力や他と協調しながら取り組もうとする意識が高まった。

##### 仮説2の手だて

- ・生徒の思考を予想し、単元を深く構想することで、教師の意識が変わり、授業への取組が変わった。生徒に問題意識をもたせるには何を仕組みればよいかを真剣に考え、実践したため、生徒の意識も変わりつつある。



保健体育科「バスケットボール」の学習におけるタブレットPCの活用



- ・課題追究の過程で生徒の考えを揺さぶり、曖昧な考えを自覚させる教師の出によって生徒の考えが明確になり、関わり合いながら学びを深める姿が見られた。
- ・座席表を活用し、論点をはっきりした板書を行うことで、生徒自身が自分の考えが話し合い全体の中でどの位置にあるのかがわかり、活発な話し合いにつながった。
- ・タブレットPCを使ってグループで話し合う場を設定したことで、生徒自身が課題への到達状況を自覚することができ、より良い取り組み方を模索することができた。

仮説3の手だて

・基礎的な学力の定着を図るために、学力検査や定期テスト、実力テストの結果を数値やグラフ化し、情報を共有した。後の教科部会で定着が浅い部分や理解が不足している内容を把握し、各教科で補充、補説、反復を行い、基礎学力の向上に寄与できた。

## 6. 今後の課題・展望

本年度は研究単元を決め、その単元を核としながら授業改善を行った。他の単元を扱う際に研究単元と同じ視点や発想をもって授業を構想できるようになることが真の授業改善につながると考える。授業力向上によって生徒の学力を高めるという気概を全職員がもって日々の授業実践に臨めるようにすることが必要である。今年度始まったばかりの研究である。継続して取り組みたい。

また、ICT 活用状況に改善が見られた。教員の意識向上を図る研修の成果が表れたのと同時に、校内無線LAN化が実現したことによる、ICT環境の充実が、ICTの活用促進を促した。来年度以降は、生徒の学びの充実に ICT がどのような役割を果たせばよいのか、さらなる研究が必要である。



教科領域指導員合同訪問における特設研究授業の様子

## 7. おわりに

「先生、今日はタブレット使わないんですか？」

今年になり、生徒からこんな質問が出るようになった。まだまだ我々の研修が足りず、タブレット PC を使った授業が多いとは言えない状況である。しかし、生徒たちはタブレット PC を使った授業を欲している。それは、タブレット PC を使った授業が心に残り、学びが残ったからではないだろうか。

今回助成していただいたおかげで、校内の ICT 環境が大きく変わり、充実した学習活動を展開することが可能になった。思考を可視化するツールとしてのタブレット PC の潜在能力はとても大きい。ハード面は充実した。あとはそれを授業に活用するソフト面、つまり我々教師のさらなる授業力向上が求められる。来年度以降も、充実した研究推進に努めたい。